Rescue Station File

レスキューステーション・ファイル

file.4 いずみさの関空マリーナ

大阪湾の南部にあるいずみさの関空マリーナは、友ヶ島や明石海峡という関西有数の釣りポイントまで20マイル足らずという好ロケーションのため、釣り好きのオーナーが多い

大阪湾のやや南寄り、海上に浮かぶ関西国際空港の対岸に位置するのが「いずみさの関空マリーナ」だ。海上係留と陸置きを合わせた収容隻数は約230隻。阪神高速湾岸線を使えば大阪市内から車で40分ほどと交通の便がよい人気のマリーナだが、ことにボートフィッシングファンからは関西エリアの拠点として一目置かれる存在となっている。

というのも西へ行けば明石海峡、南へ向かえば友ヶ島という関西の2大有力釣りポイントまで、どちらも1時間足らずという好ロケーションにあるからだ。そのため、同マリーナに籍を置く保管艇は、ヨットよりもボートが多く、さらに釣りが主目的のオーナーが多数を占めるという。30フィート以上の中・大型艇になると、夏から秋のシーズンは、カツオやカジキを狙って南紀の串本沖まで遠征するオーナーも少なくない。

またボート・ヨットのオーナーのみならず、同マリーナのレンタルボートは関西でもっとも稼働率の高いことでも知られており、その用途がやはり圧倒的に釣りなのだそうだ。そしてそのレンタルユーザーが、ボートフィッシングの楽しさに目覚めマイボートを購入して同マリーナに保管するという好循環も生まれているという。

そんないずみさの関空マリーナは、ボート・ヨットの新規預かりについてはBANへの入会を条件に定めており、マリーナ自体もまた大阪湾全域をカバーするレスキューステーションとして

クラブハウス。各種設備は充実し、桟橋および陸上ヤードへの入場は24時間可能のカードリーダー式とセキュリティも万全だ

ボート・ヨットの上下架には自走式50トンクレーンを整備

関西でもっとも稼働率の高いレンタルボート（ヤマハマリンクラブ・シースタイル）のホームマリーナとしても有名。フィッシングモデル7艇を揃え、年間約500回のレンタル実績を誇る

Rescue Boats

〈ハーモニー3〉（ヤマハFG-36）

レスキュー艇として出動することの多い〈ハーモニー3〉。無料で行われるオーナー向けボートフィッシング講習にも使用されているとか

〈ハーモニー〉（ヤマハSF-31）

こちらはコンバーチブルタイプのレスキューボート。〈ハーモニー3〉が、ボートフィッシング講習で出払っているときはこちらの出番となる

登録され、ボートレスキューの責務を担っている。

年間の出動回数は10回程度。トラブルの内容は、全国的な傾向と同様、機関故障が多いのだが、ゴミなどの海上の浮遊物がその原因になりがちというところが、大都会に面する大阪湾ならではの特徴だ。

「特に夏場の台風の後などは、要注意です。大きな流木も多いですし、ペラを当てて曲げてしまったという話はよく聞きます」と説明するのは、同マリーナ支配人の末安郁郎さんである。

レスキューに用いるボートは〈ハーモニー〉（ヤマハSF-31）と〈ハーモニー3〉（ヤマハFG-36）の2艇体制。ROCから要請があると、マリーナのイベントなどで動けない場合を除き、9割方、末安さんがもう1人スタッフを伴って出動するという。

「一番暇な人間が行くんです」と笑うが、支配人自らがレスキューを担当するとは、なんとも頼もしいRSといえる。

Rescue Station File

レスキューステーション・ファイル

file.5 高松海上タクシー

離島の多い瀬戸内海では、島民の足として重要な役割を担う海上タクシー

高松海上タクシーの多田陽介さん。小型船舶免許は自動車の免許より先に17歳で取得。香川県全域の海を熟知するプロ中のプロ

BANで救助のための船舶を出動させるレスキューステーション（RS）をになう事業者は、一般的なマリーナばかりではない。例えば、瀬戸内。香川県内を営業エリアとしている高松海上タクシーもそのひとつ。

海上タクシーとは、航路と運航計画が決まったフェリーなどの旅客船とは別に、要望に応じて人の輸送を行う小型船舶を用いたチャーター船のこと。他地域では馴染みの薄い海上タクシーだが、離島の多い瀬戸内海などではわりと普通に見られる。香川県内には110を越える島しょがあり、そのうち24島に人が住む。むろん定期船航路もあるが、それだけでは不便。いざというときになくてはならない海の足として海上タクシーは重宝される存在なのだ。

高松海上タクシーの専務兼運航管理責任者の多田陽介さんは、それまで運送業に従事したり、漁業者資格を取得し底引き網漁を営んだりしていたが、8年前に父親である同社社

高松海上タクシーの拠点のひとつである屋島湾の久通港。ここには観光チャーター・遊覧用のサロンボート（奥・18トン）と海上タクシー〈荒潮III〉（ヤマハPC-30）が係留されていた

長から「継がないのならやめる」と告げられたのを機に家業へ。地元住民の足として以外に、観光用チャーター業を展開し事業を拡大した。

昨今、瀬戸内はアートイベントの盛り上がりなどで、日本国内はおろか世界中から多くの観光客が訪れるようになり、海上タクシーの需要も高まっている。

「ただ忙しいのは秋までで、季節風が吹いて荒れるようになると、観光需要はパタッと止みます。だからこれ以上人もフネも増やせない」（多田さん・以下同）

同社は香川県内全域が運行エリアで、3カ所の港に合計5隻の船舶を用意し、これを社員2名で運用している。繁忙期などで人手が足りない際は、地元漁協などの協力者に代行を依頼することもあるとのこと。

従ってBANのレスキュー業務を引き受けるのは、本業が空いた時間という風に制限があるが、これまでに5～6回は出動。ほとんどがオーバーヒートやプロペラにロープを巻いたりというイージートラブルだという。

「ロープを巻くのは僕も10回以上やってます。そういうときは包丁を咥えてドブン。これができないとこの商売はできない。でも、プレジャーの方とくにご年配の方はやはりBANを呼んでいただくのがいいでしょう。あと、10年もたっていない新しいボートでもインペラのトラブルとか多いですよね。機械はいきなり裏切ってくれるものなので、毎日とはいいませんが時々は点検していただきたい。それとインペラにしろオイルにしろ消耗品はけちらずに換える。けちった分、しっぺ返しに遭います」

また瀬戸内は外海に比べると一般的には静かな海だが、海底地形が複雑な多島海ゆえ、少し風が出ると3つの潮流が重なってピンポイントで3～4mの大波が立つという難所や、水深10cm程度という極端な浅瀬や暗礁も多い。

取材は繁忙期がちょうど終わったという12月初旬。前日まで休み無しで働き3ヶ月半ぶりのオフというタイミングでおじゃました

高松港内にある高松海上タクシーの乗り場。著名なアートイベントの開催時期ともなると、大勢の人が海上タクシーを利用する

「ボートで遊んで楽しい海なのは確かですが、そういう情報は頭に入れておいていただきたいですね」

エリアの隅々まで知り尽くしたプロからのアドバイスである。